

徳島市民病院だより



徳島市民病院の理念

「思いやり・信頼・安心」

〒770-0812 徳島市北常三島町2丁目34番地 徳島市民病院
Tel(088)622-5121(代表)

平成31年

17号

平成31年1月

旧年中は、徳島市民病院事業へのご理解並びにご協力を賜りましてありがとうございます。

当院は、1928年に内科と産科で開院し、今年で90周年となります。徳島市医師会をはじめ、多くの先生方との連携を進めていく中、2018年度上半期の診療実績を見ると、外来患者5万4222人、救急患者4679人、紹介患者5895人、入院患者4万8399人、急性期病床利用率82.9%となっており、地域医療支援病院として重要な役割と責務を担っております。

当院は、伝統的に外科系病院の特色が強く、がんセンターと関節治療センターを二本の柱とし、政策医療である周産期母子医療を三つの柱として、三宅院長をトップに「思いやり・信頼・安心」を大切に、高度先進医療を提供しております。



病院事業管理者
曾根 三郎

昨年は、2年に一度の診療報酬改定、9月に23年振りに厚労省等の共同指導、11月には病院機能評価を受審し、当院における保険診療の適正化と効率的な診療体制への取り組みを見直す大きな契機となりました。公立病院として患者目線で地域医療支援により一層取り組んでいくためには、経営の安定化、健全化が大前提となっており、費用対効果を念頭に病院運営を図っていく所存です。

一方、2017年12月に公表された徳島県地域医療構想では、2025年問題として過剰な急性期病床数の削減対応が本年以後、本格化することが予想されます。このような中、地域の医療ニーズに応えられる病床機能をより強化するために、①手術②救急③重症の患者、の受け入れ体制をより充実させ、医療スタッフのスキルアップと多種でのチーム医療が効果的に反映できる病院へと大きく発展できる基盤を作っていくたいと考えております。関係者の方々には今後ともよろしくご支援のほどお願いいたします。

平成最後のお正月、皆さまはどのようなお過ごしになりましたでしょうか。院長職を拝命し、早いもので3回目の新年を迎えることとなりました。昨年は9月に「共同指導」、11月には「病院機能評価更新受審」という病院全体で対応しなければならぬ大きな出来事があり、事前準備を含め、職員全員の素晴らしい団結力を感ずることができた一年でした。半面、単回使用機器の件、ハードディスク紛失の件と、組織としてのコンプライアンスの整備・徹底に関して、病院の管理者として猛省させられた年でもありました。

さて、本年も昨年同様、間違いないと厳しくなっていく医療環境の中、当院の役割として医療面で住民の皆さまに安心して暮らして頂けるように、診療の基盤でもあります救急医療を含む



市民病院長
三宅 秀則

地域医療と災害医療、特に高率で発生すると言われております南海トラフ地震などの災害時でも継続的医療が提供できる体制をより一層整備しなければならぬと考えております。その上で、関節治療センターでは、高齢化社会において今後も増え続ける関節疾患患者さんに対して、術後早期の日常生活復帰へのリハビリを含めた支援を、また、がん患者さんには、がんセンターを中心に、がんリハビリテーションや緩和医療をより充実させることが必要であり、さらに地域周産期母子医療センターでは、安心して出産ができる環境の整備・維持が市民病院の使命ではないかと考えております。

経営健全化は常なる課題であります。公立病院として、政策医療としての不採算部門にもしっかりと対応し、「住民の皆さまに、いつまでもここに在ってほしい」と思われる病院を目指して参りたいと考えておりますので、本年も何卒ご協力、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

あけましておめでとようございませう
本年もどうぞよろしくお願ひします

がん患者に寄り添う 緩和ケアチームの活動

精神科主任医長 多田 幸雄

日本では2002年に「緩和ケアチーム」が制度化され、現在はがん診療拠点病院には設置が義務づけられています。また、精神科医の参加が必須となっているのが日本の特徴です。精神科と緩和ケアというあまり関係がないかと思われ

るかもしれませんが、個人的には共通点が多いように感じています。▽症状の把握が患者さんの訴えに頼るところが大きい▽エビデンスが乏しく、医療者の経験によるところが大きい▽一般的には話題に出すことを避けられがちであるが、医療現場でのニーズは増加している、といったところでしょうか

(あくまで私の考えで、異論はあろうかと思いますが)

当院では「がんサポートチーム」との名称で、以前からがん患者さんに対して支援をしてきましたが、2018年5月より



当院の緩和ケアチーム（前列左から2人目が筆者）

緩和ケア加算を算定するにあたり、チーム名を一般的な「緩和ケアチーム」に改めました。その後、約半年が経過しておりますが、2017年度に比べるとかなり活動は活発になってきている印象です。当院の緩和ケアチームには、内科医

師、外科医師、脳外科医師、放射線科医師、精神科医師、看護師、薬剤師、病院管理栄養士、臨床心理士、作業療法士、MSWなど、多職種が参加しております。毎週木曜日には回診やカンファレンスを開き、在宅医療をされている院外の医師にも参加していただいているのが大きな特徴です。また、歯科医師や歯科衛生士と連携をとり、口腔ケアにも力を入れています。

現在、一番多い介入理由としては、治療が困難となってきた

がん患者さんへの支援（緩和ケア病棟への移行を含む）となっております。また、治療早期からの患者さんへの支援も徐々に増えてきておりますので、今後是可以だけ早期から介入させていただきます。将来的には非がん患者さんへも活動を広げていきたいと考えております。課題としては、連携病院など院外の医療者との交流がほとんどないので、少しずつ検討会などを重ねていけたらと思います。引き続き緩和ケアチームをよろしくお願ひします。

当院のセカンドオピニオン外来

当院は平成22年にセカンドオピニオン外来を始めました。院長、副院長および該当科の総括部長が原則として担当し、経験豊富な医師の診断の元、患者さんに信頼して頂ける意見の提供に努めております。患者さんやご家族から患者支援センターにセカンドオピニオンの申し出があれば、相談担当医と日時の調整を行い決定します。

25年5件、26年6件、27年14件、28年4件、29年8件、30年（10月現在）6件で計53件となっています。内訳は外科29件、内科7件、整形外科7件、産婦人科4件、耳鼻咽喉科3件、脳神経外科2件、泌尿器科1件です。圧倒的にがんの相談が多く36件で、2位のバセドウ病3件と続き、脊髄症、肺炎、骨折、ヘルニアなどの相談がありました。

（患者支援センター 梶村知弘）

これまでの相談件数は、平成22年1件、23年6件、24年3件、



眼科 主任医長 西野 真紀



麻酔科 主任医長 山崎 理絵

新任医師
のご紹介

すい臓がん

がんの生存率は、さまざまな治療法により改善していますが、その中ですい臓がんは5年生存率が9.2%（国立がん情報センターがん情報サービスより）と、依然として予後が悪いがんの一つです。すい臓がんは症状が出ず、早期発見が困難で発見時には進行・転移している場合が多く、比較的早期に手術を行った場合でも術後再発が多くみられます。

根治治療は外科的切除ですが、これに術後補助化学療法としてS11内服を加えることで予後が有意に改善されることが証明されました。また、高度の局所浸攻や他臓器への遠隔転移があれば、従来は切除不能でしたが、最近、強力な抗がん剤治療を行い、その後切除を行うコンバージョン手術が報告されています。切除不能と判断された場合でも、抗がん剤や放射線など治療の選択肢が広がっております。

すい臓がんの手術は高難度で大きな手術となることが多いですが、当院は徳島大学病院とともに徳島では数少ない肝胆膵外科学会の高度技能専門医修練施設の認定を受けており、高度技能指導医と高度技能専門医が常勤し、より安全に手術を実施できる体制を整えております。また、すい臓がんは胆管閉塞や消化管の閉塞を生じることが多く、このような場合には消化器内科によるステント治療を、さらに化学療法や放射線治療など複数科にわたっての医療が必要とされることから、院内カンサードボードで議論し治療方針の決定を行っています。

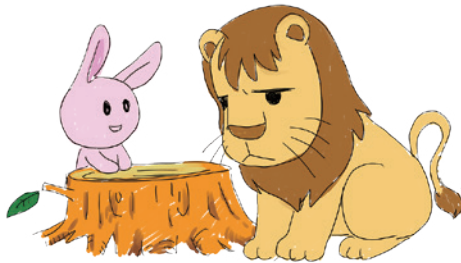
（外科主任医長 荒川悠佑）

がん豆知識



個別カウンセリングを承っております。当院での業務は、個別カウンセリング、患者支援センターでのがん相談業務、心理検査などです。本人にカウンセリングの希望があり主治医の了承が得られている方であれば、入院外来問わず

活動の場は多彩で、病院・学校・司法・福祉などがあります。この多くの領域の中で、私は大学院修了後から現在まで身体疾患をもつ患者・家族の心理臨床に携わらせていただいております。



がいらっしやれば、当院には支援・相談ができるこころの専門家（精神科医・臨床心理士）がいることをご紹介いただければ幸いです。（イラスト・伏谷秀治薬剤部長）

当院には精神科医師が常勤で勤務しており、薬物療法と非薬物療法（カウンセリングなど）を組み合わせた精神的支援が可能です。幅広いニーズに対応できるように今後も自己研鑽を続けてまいります。皆さまの関わる患者さん、ご家族で精神的支援が必要とする方



臨床心理士
加藤 美玲

複雑化する社会の中で心理的課題を抱える方が増え、専門職の援助が求められることも多くなりました。臨床心理士は、心理的課題を抱える方の支援を行う専門職として活動しています。ります。着任当初はがん患者に対象を限っておりましたが、現在は疾患を限定せずに依頼をいただくようになりました。誰もが持つ健康なこころにアプローチしていくことで、身体疾患によって調子を崩したこころの健康の回復を促進していく、という視点が、患者・家族の心理臨床を行う臨床心理士の姿勢として大切ではないかと考えております。

こころの健康を
支援します

私たち薬剤師が院内でどのような業務をしているかご存知でしょうか。調剤や外来窓口の服薬指導だけでなく、病棟専任薬剤師として「病棟薬剤業務」や「薬剤管理指導」などを入院患者さんに対して行っています。「病棟薬剤業務」は主にお薬の処方前、「薬剤管理指導」は処方後に患者さんに関わり、安全に薬が使用されているか確認しています。今回は病棟薬剤業務についてお話しします。



病棟薬剤業務を開始

当院は2017年12月に病棟薬剤業務を開始し、HCUをはじめ、6～11階病棟に病棟専任薬剤師を配置しています。具体的な業務としては、カルテや紹介状などから患者さんの服薬状況を確認したり、分からない場合は紹介元や調剤薬局へ問い合わせたりして服薬状況を把握しています。また、入院時に持参されたお薬を調べて主治医に知らせ、採血結果や患者さんの体調などを見極め、最適なお薬の提案や相談をしています。



このように入院患者さんにお薬が処方される前に、安全かつ有効な薬物療法が行われるかを確認しているため、これまでより医師や看護師など他職種の方と話し合う機会が多くなってきました。

患者さんへのお薬の処方で気になることや困ったことがあれば、遠慮なさらず当院薬剤部へご相談ください。

（文・天野幸子薬剤部主査 イラスト・伏谷秀治薬剤部長）

11月版 研修医日記

臨床研修医2年目 柿本 拓海

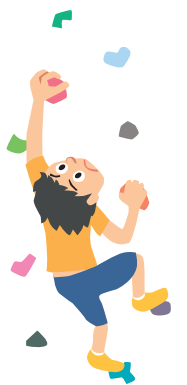


研修生活も残り数カ月で終わりを迎えようとしていますが、環境に恵まれ非常に充実した研修医生活を過ごさせていただいています。

ところで、私は学生の頃からの趣味としてボルダリングをしております。よくボルダリングとロッククライミングの違いについて質問されることがありますが、比較的高さのない壁や岩をロープなど使用せずに身一つで登るものをボルダリングと呼びます。何がそんなに面白いの、と聞かれることもありますが、一番楽しいことは苦労して何日もかけ、場合によっては年単位の日数をかけて登りたかった岩が登れたときの達成感に尽きると思います。

インドアのジムでも、アウトドアの岩場でも共通していますが、自分に合ったレベルの課題を楽しめることも魅力の一つです。簡単なものではハシゴや階段を上る程度のものからあるため、普段は運動をしない人も楽しめると思います。また、外の岩場でマットだけを頼りに数メートルから10メートル近い岩を登るときはインドアと全く違う緊張感を感じることが出来ます。

さて、私は多くの方の指導を受けながら、患者さんを助けるというゴールのない高い壁に取り付いています。今、まさに、床から左足が離れました。



糖尿病デー

院内で多彩なイベント 食事療法や運動教室…

世界糖尿病デーの11月14日（前）に13日、院内各所で健康相談や食事療法、運動療法など多彩なイベントが開かれました。午前11時からエスカレーター上部の通路に歯科相談、食事相談、お薬相談、血糖測定のコナーが設けられ、患者さんらは効果的な歯の磨き方や菓子を飲み忘れたときの対処法などを担当者に尋ねていました。



ればお寿司が食べられることを知ってほしい」などと話しました。糖尿病看護認定看護師の藤川美恵さんが測定した血糖値では、全ての患者において食後の急激な血糖上昇はみられることなく、栄養のバランスが取れていれば血糖値も安定することが証明されました。参加した男性患者は「糖尿病食で寿司が食べられるとは思いませんでした」と喜んでいました。

午後1時から、吉野川河川敷往復ウォーキングを予定していましたが、天候不順のため2階健康教室での運動療法に切り替え、理学療法士の米本真吾さんの指導で椅子に座ってできる運動で汗を流しました。その後、井野口卓内科主任医長の「災害時の糖尿病治療について」と題した講演がありました。井野口医師は東日本大震災や西日本豪雨災害でのDMAT派遣経験から「糖尿病患者は災害弱者です。常用薬は2週間分持つてほしい。非常時持ち出し袋にお薬手帳のコピーを入れておくなど、自分の治療内容を把握しておくことが命を守ることになります」などと話しました。

渭北・川内・応神地区医師会から 大量の災害対策物品を頂きました

徳島市医師会の渭北・川内・応神地区医師会から、このほど大量の災害対策物品を頂き、三宅秀則院長から同地区医師会の南定（みなみ・さだむ）理事と吉田智則理事に感謝状を贈りました。寄贈品はエマージェンシーストレッチャー1台、加湿空気清浄機3台、スクープストレッチャー1台、電子血圧計1台など8種類計19台、総額170万円分の災害対策物品です。三宅院長は「多くの物品を頂き感謝します。災害時だけでなく救急医療にも役立てて市民の医療向上に努めていきます」とお礼を述べました。



医療・介護連携交流会にご参加ください

当院患者支援センターが2017年度から始めた医療・介護連携交流会は、昨年11月6日の交流会で5回を数え、お互いの顔が見える関係へと発展・定着してきました。高齢社会を迎え、地域の医療と介護関係者の連携は待ったなしの状況となつていきます。交流会には毎回、他職種の多くの方が出席してくださり、その都度テーマを変えて開くグループワークでは、活発な意見交換で盛り上がりつつあります。今後も年3回のペースで開催しますので、ご出席をよろしくお願ひします。これまでの参加概要をお知らせします。



- 【参加】 11職種43人、24施設
- 【第3回】 平成30年1月23日 「よりよい看取りを目指して〜よりよい看取りのために私たちにできることは〜」
- 【参加】 11職種59人、30施設
- 【第4回】 5月15日 「スキンケアについて〜当院の紙おむつ使用の現状〜」
- 【参加】 10職種50人、29施設
- 【第5回】 11月6日 「高齢期の栄養について〜食べる力を支える低栄養にならないために〜」
- 【参加】 12職種51人25施設
- （患者支援センター 浅田洋子）

ご寄付を頂きました

当院で手術をされた方から「医療の向上に役立ててください」と100万円、入院患者さんから「医療施設の充実に役立つ

ててください」と300万円の現金を頂きました。患者さんのご趣旨を生かし、関連物品の購入に充てさせていただきます。このほか、入院患者さんから自作の壺なども頂きました。